



工房だより

～ペットのための自然食キッチンから～

2026年5月号
vol.96



今月の一枚

ララちゃん

4才 撮影時
豆柴



スーパー繊細ビビリの箱入り娘。こちらのフードに変えてから、ウンチはほぼほぼ百点ウンチ、アレルギーがちな皮膚も大分落ち着いて、首にできていたハゲもなくなりました。味も美味しいようで、もともとカリカリ嫌いの偏食でしたが、よく食べてくれるように。(もちろん今もムラはありますが笑)

ワンちゃんのお写真募集中!

メールにて、どんなワンちゃんか一言添えてお送りください。

採用された場合には心ばかりのお礼をお送りします。

info@petfood-kitchen.co.jp



フォローして

ワンちゃん情報やキャンペ

ーン情報をチェック!!



サイトリニューアルのお知らせ

お知らせ

4月20日～23日までサイトをクローズし、ご迷惑をお掛けいたしましたこと、心よりお詫び申し上げます。お陰様でサイトのリニューアルが完了いたしました。是非、のぞいてみてください。

またリニューアルに伴う、レビュー投稿にご協力いただきありがとうございます。今後のレビュー投稿についても、引き続きご協力くださいますようお願いいたします。

ご不明な点はお客様窓口までご連絡ください。電話 0120-634-436

10時～17時30分(日祝休み)

わんちゃんと旬を楽しむ

第十四回 鯛のソテー

鯛のソテー ラビゴットソース風



レシピについては、上記の

Instagram からご確認ください。

Instagramで動画配信中:

レシピ提案/撮影: yamashita_rei

第二回 犬の歯磨き、やるべき? 科学的根拠に基づく頻度とケア

今回は、予防法である「歯磨き」について解説します。

■歯垢が「歯石」に変わる

スピードと歯ブラシ

歯垢(プラーク)は、清掃後8～24時間で生成され、そこから犬の場合は「3日～5日」で石灰化(歯石化)が始まるとされています。一度歯石になってしまふと家庭でのブラッシングで除去することは物理的に不可能です。

AAHA(アメリカ動物病院協会)の歯周病治療ガイドラインにおいては、毎日の歯ブラシが推奨されています。私は、難しい場合は少なくとも2～3日に1回の歯磨きをお願いしていますが、理想的に毎日、1～2回のケアが必要と考えています。

■「何歳から」始めるべきか

「永久歯が生え揃う前(生後数ヶ月)」からのトレーニングが推奨されます。この時期は社会化期にあたり、新しい刺激を受け入れやすいからです。ただし、乳歯の生え変わりの時期ですので、ブラシで強く磨い

てしまうと痛みを感じ、受け入れなくなる場合があります。

まずは歯に触る練習から初めて、生え変わってから本格的にブラシを使うようにしましょう。成犬になってからでも、脱感作(少しずつ慣らす手法)を用いることで、ケアが可能になるケースは多くあります。

■ 歯磨きができない場合の

「代替ケア」の効果

どうしても口を触らせてくれない場合、デンタルガムやサプリメントを使用することになります。あくまで「補助的手段」と捉えるべきです。

・**機械的清掃効果**… 噛むことで物理的に汚れを落とすもの

・**化学的清掃効果**… 酵素や特定の成分で菌の増殖を抑えるもの

いくつかの研究では、特定のデンタルガムやフードを与えることで歯肉炎スコアが改善したという報告もあります。ですが、歯周ポケット(歯と歯茎の間の溝)の汚れまでは除去しきれないと考えられています。代替ケアを行う場合でも、可能な限り「ガーゼ拭き」などを併用し物理的に汚れを除去する努力を続けることが重要です。

どうしても歯磨きができないと歯垢・歯石が沈着し続けてしまい、歯周病が悪化しやすくなります。必要に応じて、動物病院での歯石除去も行いながら、お口の衛生環境を保つようにしてください。

■ 「プロフェッショナルケア」

歯石除去(スケーリング)の推奨頻度

「病院での歯石除去はどれくらいすればいいですか?」これもよくいただく質問です。どれほど完璧に歯磨きをしていても、汚れを完全に除去することは困難です。AAHAガイドラインでは、年に一回の全身麻酔下での歯石除去が推奨されています。「毎年麻酔をかけるの?」と驚かれることもありませんが、歯石が重度に沈着して歯周病が進行してから抜歯などの処置を行うよりも、「予防的なスケーリング」を行う方が、健康管理の上ではより良いと考えています。

毎日の歯ブラシと年一回のプロフェッショナルケアが、愛犬の歯を守る「ゴールドスタンダード(最善の策)」と言えるでしょう。

世田谷獣医師科診療

獣医師 岡田 純一



房さんは、道端にきれいに咲く花の中に毒を持つものがあり、うっかり口にし、命の危険にさらされた子の話をオウちゃんママから聞きました。その話を工さんに伝えると、深く頷き「散歩中の拾い食いは、誤飲や中毒のリスクが常に隣り合わせだからね。実は、歩いている間はずっと気が気じゃないんだよ」と切実な思いを打ち明け、「予防は『叱る』ことより、リードさばきで未然に防ぐことが大事だ」と言葉をつづけました。房さんも共感し、



二人は早速、練習を始めました。まずは、リードは長く伸ばしすぎず、常に愛犬の動きを把握できる長さに保ちます。

地面に顔を近づけそうになったら、強く引くのではなく、軽く短く引いて意識をこちらに戻します。同時に名前を呼び、アイコンタクトが取れたらすぐに褒めてあげる。目が合った瞬間にしっかりと褒めてあげることがコツです。「飼い主を見ると良いことがある」と学習すれば、意識は自然と地面から離れていきます。房さんも叶ちゃんの様子を見ながら頷きます。

また、歩くスピードを一定に保ち、叶ちゃんやもっくんが先行しすぎないように横につく練習も繰り返しました。日頃からの落ち着いたリードコントロールこそが、予期せぬ中毒や誤飲から愛犬を守るための、確かな第一歩になる。二人はその重みを噛み締めながら、一步一步、歩調を合わせて進んでいきました。



つづく